

幕末期萩藩における給領取立農兵

——寄組浦家を事例として——

上 田 純 子

はじめに

幕末の長州藩^①では、対外的危機意識の高まりのなかで、藩軍事力の洋式銃隊化が推進されるとともに、奇兵隊をはじめとするいわゆる諸隊や農町兵の取り立てが行われ、攘夷に備えた沿岸警衛の整備、殊に禁門の変後には、征長軍の進入に備える国土防衛戦争への準備が、総動員体制の下に進行する。このうち、いわゆる諸隊軍事力については、討幕派軍隊の形成とその特質の解明という研究視角に基づく膨大な研究蓄積がある。その一方で、支藩や家臣団諸家の軍事力、代官所が組織した農兵隊等については、十分な注意が払われてこなかった。なかでも、高禄家臣団諸家の軍事力は、戊辰戦争期にも諸隊と共に長州藩軍事力の中核をなしているにも拘わらず、これまでほとんど論じられていない。このような研究の偏在は、熊沢徹氏が幕府軍制改革の事例によって明らかにしたような、極めてドラスティックな封建的軍事力の改革を議論することなく、奇兵隊に代表される諸隊を、近世の身分制に依拠した軍事力に代わる新しい軍事力として、長州藩軍事力の中核に位置付ける見解を通説としてきたように思う。

本稿では、長州藩におけるこの封建的軍事力の改革を議論する一素材として、高禄家臣諸家による百姓身分——農兵の動員という問題を取り上げる。長州藩の農兵隊は、諸郡代官所が管轄下の蔵入地取立農兵を編成した郷勇隊がよく知られているが、家臣団諸家が給領から取り立てた農兵の存在も指摘されている。本稿では、萩藩寄組浦家を事例として、この給領取立農兵の、家臣団諸家軍事力における役割と身分規定について、時期を追って見てみることにしたい。

この問題に関わって、久留島浩氏の「近世の軍役と百姓」^②を挙げておく必要がある。久留島氏は、幕末期の農兵について、郷土防衛に限定された百姓としての農兵と、幕藩領主が「士」またはそれに準じる武家奉公人への身分変更という手順を経て組織する、あるいは「士」という自己認識に基づく豪農層（草莽層）が自ら組織する農兵とに分けて整理し、これを幕藩体制下における身分と役との関係の歴史的性格として論じた。本稿もこの久留島氏の業績に負うところが大きい。しかし、特に禁門の変以降の長州藩は、国土防衛戦争の非常事態であり、そのような状況下に兵と農の身分規定が如何なる状態であったのかを検証することは、身分制に基づき編成された封建的軍事力の変

窓 質・解体過程を解明する上で重要な作業であると考える。

史

なお本稿では、浦家の動向を知る史料として、幕末期の当主である靱負元襄の日記——以下「浦日記」^①を使用する。全六二冊のうち、安政四年（一八五七年）から明治元年（一八六八年）までの一二年間一八冊分について、今回分析の対象とした。

一 浦家の給領取立農兵

① 浦家の農兵取立

浦家の農兵取立について、本稿が検討の対象とした「浦日記」の最も早い記載は、文久元年（一八六一）一月一六日条における、安政六年（一八五九）の「神明祭式書付」である。神明祭は、浦家給領の中心である上関宰判伊保庄阿月で毎年小正月に行われる祭礼であり、浦氏の祖先である乃美宗勝の武勲を称えることに始まるとされ、東西二組に分かれて各々神明と称する大鉾を競い立て、これを燃して災厄を払う。同書付には「去年之通り神明起、手頭・農兵貳拾五人宛、此手頭式人宛之事」とあり、安政五年（一八五八）より神明を起すのに、東西二組の手頭以下農兵が、祭式の中に組み込まれたと判明する。ここから、浦家では安政五年以前より、給領での農兵取立を行っていたと確認出来る。靱負は同五年夏の藩政改革過程で藩政釐革要項が諮問された際、「御両国御手広之海岸急変之節、防禦方之儀、在住之諸士而已に而者難行届に付、農兵御引立置肝要」^②との意見を提出しており、その給領での農兵取立も、主に瀬戸内に面した給領の海防を目的としたものと推察される。

文久二年（一八六二）三月二六日条には、この農兵のうち、老衰・差聞・病氣により断りを申し出た者の入替の記事と共に、農兵側からの願い出とその裁定が記載されている。次にそれを見てみよう。

阿月東西農兵共々、非常之節者ハ帶刀御免ニ而候処、常々差付不申而者何か之時腰重ク、或ハ引付忤いたし候而ハ、其詮無之儀ニ御座候間、常々一刀丈相帶候義被差免候様、將又常々足役御免被仰付候様、兩条願出候、右ニ付、於下致詮義候処、一刀丈之儀ハ御免相成候而も可然、足役御免之義者、多人数故惣之及迷惑義ニ候間、出張之日限ニ応し、一ヶ年成共二ヶ年・三ヶ年成共、又功有之節ハ終身成共、其時ニ応し詮議被仰付候而ハ如何可有之哉之段、敦之助窺候間、其通りニ而悪かるましく段、相答候事

この願い出以前から、農兵には非常有事の際の帯刀が免じられているが、これは戦闘員として武器の携行が許可されたものと理解出来る。しかし日頃の帯刀は許可されておらず、そこで農兵側は、日頃からの一刀帯刀という特権の免許と、公用交通に関する人馬出勤や諸普請への出人足など、百姓夫役の一つである足役の免除の二点を願い出る。この願い出に対し浦家では、一刀帯刀は許可するが、農兵全員の足役免許は、惣すなわち給領全体の迷惑になるとして却下、出張日数・勤功によってその都度詮議することを決定している。浦家は、農兵をあくまでも百姓身分として把握し、それに帯刀や勤功による足役免除等の諸特権の付与を提示することによって、その献身を得ようとしているのである。農兵側にとってもそれは、地域社会における地位向上・身分的特権獲得の回路であり、農兵を務める百姓のなかには、農兵としての務めのほかに、献金等浦家に対し積極的な働きかけを行

う者も見受けられる。次に引用するのは、文久三年（一八六三）春まで農兵を務めた為蔵に対する、浦家からの賞美の文言である。

百姓ノ
為 蔵

右先年農兵御撰取被仰付、尔来堅固之覚悟罷居候処、御縁合を以当春農兵被差除、悴嘉吉江後役被仰付候処、是亦其覚悟堅固之者ニ候、将亦為御武備昨年金千両御頼母子御取建ニ付、加入被仰付候処、速ニ遂其節、且今般 御出張之節、悴嘉吉義御供被仰付候段沙汰相成候処、速ニ御請申上、実ニ神妙之者ニ候、就而、方今御時勢ニ付、報国之志を以際々余分遂献金候ニ付、今般御武備用之内江被相加、屹与御用ニ相立候旁、厚志之程達 上聞、神妙之至候、依之格別之御詮議を以、足役被差除、証人百姓ニ被仰付、御上下被差下、明暮井ニ有廉節御勤被差免候条、此段可有沙（朱）少々詮議相替、永代苗字被差免、明暮井ニ有廉節御勤且上下着用被汰候、以上 差免候条此段――

この賞美は、同年九月、浦家嫡子滋之助親教が御上京御供を命じられたことを受け、阿月知行所内の庄屋等四人が献金を願ったことによる。^③引用中で賞美の対象とされているのは、一つは為蔵本人およびその悴嘉吉の、農兵としての心構えであり、もう一つは文久二年武備充実のため組まれた頼母子への加入や、武備用に供するための四〇両の献金等、浦家に対する出金である。これらの功績により、為蔵は、足役の免除や証人百姓の地位、苗字・上下着用等の特権を得たのである。

この時賞美を受けた一人に、農兵手頭を務める禎蔵もいる。禎蔵は滋之助出張供の命を蒙ったことに対し「乍不肖抛身命御奉公申上度」^④との請書を提出し、武備用として二十両を献金したこと、また万延元

年浦氏の知行所引越しに際しても、畳表数枚を献じたことにより、永代苗字が免許されている。浦家の給領取立農兵には、このように富裕な上層農から輩出された者が確認されるのであり、また前掲引用では、為蔵が農兵を辞めた後役をその悴が引き継いでいることから、この農兵が、給領百姓に対し均等に賦課されるものではなく、特定の階層によって担われ、継承されるという一面のあったことが窺える。彼らは農兵として、また献金を通じて浦家に奉仕し、それによって地域社会における地位の向上や諸特権を獲得していったのである。

三宅紹宣氏は、藩庁の、豪農層の取り込みによる政策強化と、豪農層の、藩庁による特権付与を期待しての接近、という両者の共生関係が、近世中・後期を通じてみられることを指摘したが、給主と給領上層農との間にも、同様の関係が形成されていたと推測される。^⑤幕末の浦家給領農民による農兵取立への応徴は、情報ネットワークの拡大による政治情報^⑥の拡散と、それに伴う対外的危機意識の浸透という幕末の政治社会状況を反映する一方で、そこに幕藩領主からの身分的特権の獲得という動機が含まれることを指摘出来るのである。

② 農兵の地位と自己認識

次に、浦家給領における農兵の地位とその自己認識について、農兵が百姓とともに動員されている事例のなから、若干の検討を加えてみることにしたい。

「浦日記」には、浦家が給領から夫役を徴発し使役する記事が散見するが、それは、水害による給領内用水破損個所の普請、浦氏居宅等の普請・修復のほか、外国船の襲来に備えた菊ヶ浜土塁の築造や、藩

主の山口移鎮に伴う御屋形地開作の加勢夫等の労役に従事させるものである。このなから、農兵の労役と百姓夫役が同時に徴発されたことが確認出来る、菊ヶ浜土塁築造の加勢夫について見てみよう。

菊ヶ浜は日本海に面する萩の前庭であり、そこへの土塁築造は、文久三年五月以降攘夷を決行する萩藩にとって、萩城およびその城下町守衛の一環として重要な意味を持つ。当時藩主は既に山口へ移り、それに伴って藩政運営上の諸機能も漸時山口に移されてはいたが、依然萩には領国内金融センターをはじめ城下町としての諸機能が残存しており、萩守衛設備の充実もまた、山口関門の造営・下関砲台の起工と並ぶ軍事上の重要課題であった。藩はこの造営事業を萩近郊士民からの貢献によって賄うべく、在萩諸士中にも、六月一五日、「攘夷之御策略に付、御城下之御固筋不容易御造作之儀に付、在萩の諸士中末々迄、心持次第、人役は勿論、何に依らず御入用之品勝手に差上候様、被仰付」れることが触れ出される。これを受け、浦家では木谷良蔵・矢野範輔が差配のため出萩し、「嘉万村農兵地下人相交へ四拾人斗」を動員して、七月八日から一〇日までの三日間、土塁築造の加勢を行っている。七月二九日条は、その「御加勢面着」として出役者の書上を載せるが、これによると、浦家は、士分・奉公人併せて四人、嘉万村夫四人宛が、三日で延べ一三五人の加勢を行っている。その嘉万村からの出役者を記した部分を以下に引用しよう。

嘉万村庄屋 刀 祢 三郎兵衛
農兵 同人 伴 安 蔵
同 人 下 人 宇 吉
畔頭 久右衛門

農兵 同人 伴 虎 蔵
農兵 重蔵 伴 刀 祢 豊 三 郎
同 人 下 人 幸 吉
農兵 市 蔵
農兵 林 蔵
同 平 八

(外四人略)

政 吉
善 蔵
仁 吉

(外二四人略)

以上四拾老人

嘉万村からの出役人数の内訳は、夫の引率に当る給庄屋・畔頭の村役人が各一人宛と、農兵一〇人、内二人は各一人宛下人を従えている。そして百姓中二七人である。ここでの筆順は、庄屋と同伴、畔頭と同伴、農兵およびその下人、百姓と続いており、農兵は百姓中の上席に置かれ、村役人に次ぐ待遇を受けることが判明する。嘉万村給領の詳しい階層構成は今のところ不明だが、同年一月九日条には「嘉万村領分庄屋、刀 祢 重蔵年番ニ申付」と記されていることから、刀 祢 三郎兵衛家と刀 祢 重蔵家が輪番で給庄屋を勤めていたことが窺える。

この両刀 祢家の安蔵と豊三郎は、各々下人を従えて加勢に加わっている。同じ家のなかにあっても、庄屋は下人を伴わないことから、これは兵としての自己認識、すなわち、武士は従者を召し連れ、戦場では武士と従者とが一つの戦闘ユニットを構成するという、兵の觀念に

根ざしたものと考えられる。しかし、畔頭倅虎藏をはじめ、他の農兵は下人を連れていないことから、これは、あるいは苗字を免許された両刀祢家の、武士身分意識に裏打ちされたものであるかもしれない。少なくともここからは、農兵のなかに、給領内の階層や地位に相応する序列の存在することが指摘出来よう。

さて、これら嘉万村出役人数は、萩の浦家屋敷に滞在して労役に従事したが、七月二一日、刀祢三郎兵衛・久右衛門・刀祢重藏の三人が、その間の飯米として、二斗宛計六斗の馳走米の供出を申し出ている。^②この飯米供出や、各々倅の農兵への応徴は、前節で見た給領上層農と給主との、共生関係の事例であるといえよう。

二 給領取立農兵の動員

① 文久・元治期

次に、軍事行動への動員という局面において、この給領取立農兵が浦家軍事力のなかでどのように機能したのか、時期を区切って見てみよう。本稿が扱う時期の浦家における農兵動員には、まず文久二年四月、靱負の京撰派遣がある。これは、外国船の入港に備える兵庫御備場への兵力増強の一部であると同時に、島津久光の率兵上京により緊張する京都政局への対応と、御備場・在坂・在京諸士の指揮役を望まれている派遣であり、浦家にとっては、幕末期に課せられた藩域外への最初の軍役動員でもある。靱負は見習として嫡子滋之助を伴い、四月六日阿月を發て一四日西宮に着、そこで御備場役人より在京稽古人数の指揮を依頼され、二一日京都藩邸に入る。

この出張に浦家が動員した人数は、陪臣^③大番通り以上三六人、一己通り六人、中間以下の奉公人一〇人と、阿月東西組・相ノ浦等の農兵および農兵飼子一人、その他雇の船頭・飼子等を含め総勢九三人である。^④四月三日条には、浦家の備立が添付されているが、陪臣と奉公人の五二人がそれを構成しており、農兵以下はその人数に含まれていない。この出張において、浦家の備を構成した、すなわち戦闘員およびその補助員として召し連れられたのは、陪臣と奉公人に限定されるのであり、農兵は、百姓から水陸夫役を徴発する代わりとして、飼子や小荷駄の運搬等に使役されたものと推察される。

この人数のうち、少なくとも七人の農兵は、京都まで出張したことが確認できる。五月四日条には、そのうちの彦右衛門について、「心得宜由ニ付、廉有節帶刀差免」との詮議物の窺われたことが記載される。彦右衛門は、これにより制限付の帶刀特権を得るのだが、これは農兵に対する賞美が、百姓身分に対する特権の付与として行われたことを示している。このように、文久期の農兵は、名実共に百姓身分として把握されていたのであり、浦家備のなかでも、戦闘員あるいはその補助員としての扱いを受けていないことが明らかになる。

次に浦家が動員されたのは、元治元年（一八六四）七月、前年の八・一八政変による失地回復のため計画された、萩藩世子毛利定広進發上京への、嫡子滋之助の御供である。六月四日から六日にかけて、この進發を睨んだ教練が繁枝原で挙行されたが、滋之助は浦家の陪臣等からなる一手の備を率いてこれに参加している。六月六日条には、この滋之助の備付と着到状が記載されているので、以下それらを見てみよう。次に引用するのは、備付の末尾に記された、備人数の各階

窓 層毎の内訳と総人数である。

〈備付略〉

史 以上

士 貳拾八人
一己 拾貳人
足輕中間 拾六人
農兵 貳拾四人
メ八拾人

夫役十七人 阿月
同 三拾人 嘉万

都合百廿七人

備付からこれら人数の配置を概観すると、大番通り以上の士分とそれに準じる一己通りは、陣場奉行・旗奉行や斥候などの役付のほか、馬廻りや銃隊に編成され、足輕中間の奉公人は、陪臣の鎗持や諸役人の手付を勤める。うち小荷駄奉行の槍持は、前出の嘉万村給領農兵刀祢豊三郎が勤めており、これは奉公人の待遇を受けたものと考えられる。他の農兵は、運搬に力仕事の必要な砲隊と小荷駄警衛に配されており、下級の戦闘員として備のなかに編入されていることが窺える。これに対し夫役人数は、小荷駄備を中心に、松明・火縄・蓑等の入った長持の類や、台所道具等諸道具の運搬に充てられている。ここから、この浦家の滋之助備は、士・一己・足輕中間・農兵の八〇人を戦闘員および戦闘補助員とし、小荷駄要員として阿月・嘉万村給領から徴発された四七人の夫役人数を含んで、総人数一二七人から構成されていたことが窺える。

次にこの備を、着到状から見てみよう。

着到

浦 滋之助
従者四拾人
中間四拾人
馬 貳 正
野戰砲 貳 挺
小銃 三拾貳挺
槍 七 本
以上

着到状には、滋之助が召し連れた軍役相当の従者・奉公人数と、馬および武器数が記載される。このうち従者は前掲備付の士と一己を、中間は足輕中間と農兵を併せた人数となる。ここから浦家では、この軍役動員に際して、農兵二四人を百姓身分としてではなく、奉公人身分として藩へ届けるという操作を行っていることが判明する。また、この着到状には夫役人数が記載されない。この教練において三〇〇〇石以上の諸家へは、兵糧もふくめ「武備一己前自分捌」が命じられているが、浦家でも軍役人数の外に、給領から夫役を徴発し、小荷駄備を含み込んだ一手の備を編成して、これに参加しているのである。

この段階で農兵は、陪臣、奉公人とともに、浦家備における戦闘員・戦闘補助員となっている。農兵は、藩に対する届の上からも、備内部での勤めにおいても奉公人に準じており、百姓夫役の延長に過ぎなかった文久二年の京撰出張時とは異なった位置付けが、備内部に与えられたのである。これは、滋之助の進発上京御供下命にともない、

浦家では、当役として山口警衛の任を負う靱負と滋之助の双方に備を編成する必要が生じ、備人数の確保が問題となったことに起因すると考えられる。浦家は、軍役を勤めるに相応しい年格好の奉公人の不足を、給領取立農兵によって代替したのである。同時に今回の動員では、軍役人数とは別に、多くの夫役人数が小荷駄要員として給領から徴発され、従軍している。^③ここでは、慶応期の夫役人数との関連で、夫役の総人数に占める割合が、三七%にも及んでいることを確認しておきたい。

さて、世子進発の斥候備指揮を命じられた滋之助主従は、七月一二日山口を発し、一九日兵庫に着く。そこで禁門の変の敗報を受け、翌二〇日夕刻兵庫を出船、二八日三田尻に帰着する。^④この敗報が伝わり、追手の襲来に備え、上関宰判代官内藤左兵衛より、浦家知行所へ御手当向用心が申入れられ、さらに代官からの下知によって、秋良佳之助以下、士分・農兵混合の三四、五人が出張する。浦家へは、前文久三年夏、上関・大島郡辺警衛が命じられた際、上関・大島郡惣奉行毛利隠岐の指揮を受けるよう指示されており、動員に際して通常はこの惣奉行から浦家へと命令伝達が行われるはずであるが、この時は、二五〇石以下大組（馬廻）士から任用される代官が、高禄家臣家に対し動員を指令したのである。以降浦家とその給領は、征長軍の進入に備える軍事的緊張の下に置かれることとなる。

② 慶 応 期

元治元年秋以降、恭順を掲げる政府と諸隊との対立が激化し、翌年（一八六五）正月には、諸隊の軍事クーデターによって、終に武力衝

突に発展する。この内訌を経て、萩藩は武備恭順という政治路線を選択、挙藩一致して防長二国防衛のための軍事体制確立を目指すことになる。^⑤そのため軍制にも大幅な改編が加えられた。この改革の過程で、閏五月山口軍政方により、家臣団各家毎の陪臣・奉公人等の姓名や、装備等が調査される。^⑥この時浦家が提出した器械・人数付には、大番通り以上九一人、一已通り四八人、奉公人三〇人、平育者三四人都合二〇三人の外に、小隊人数阿月分として、二八人の名前が書き上げられている。^⑦この二八人は、閏五月十三日条の「農兵致替石割ニノ阿月廿八人、相之浦三蒲（以下空欄）」の記事から、阿月の農兵数と判明する。これに関連して、五月二四日条は以下の記事を載せている。

〈前略〉農兵是迄八百五十六拾人も有之、真之虚飾実用に不相叶、右ニ付此度撰精いたし、阿月相之浦三蒲ニ而五拾五人ニ相定、規則書等旁今日一同相窺候、農兵者小隊丈相調候様、十右衛門致心配候、農兵役中帯刀差免候事

慶応元年五月、浦家の農兵数は一五〇人以上に及んでいたのであり、浦家ではこれを五五人にまで削減することに決め、石割で人数調整を行い、そのうち二八人が阿月、他の二七人は相浦と三蒲村へ割り当てられたことがわかる。またこの段階で、浦家は農兵規則書を制定し、それまでの役中一刀免許を、帯刀免許に改めている。ここに、精選された農兵の地位の上昇を認めることが出来るが、しかし阿月農兵二八人のうち、苗字が記載されるのは吉本嘉吉一人だけであり、帯刀は武士身分への編入を意味するものではない。

さて、山口軍政方は、前述人数付の提出を受け、浦家軍役を以下の

窓 ように指令した。

覚

史 一銃隊三小隊

内

一小隊三拾式人

士分持筒装条銃

一小隊三拾式人

足輕中間之間持筒劍銃

一小隊三拾式人

農兵持筒同断

一士官拾五人

内

小隊司令三人

半隊同 三人

嚮導 六人

押後 三人

以上^⑤

この軍役改正によって萩藩の家臣団諸家軍事力はすべてが銃隊化され、軍役人数は銃卒のみとされて、軍容も一変する。^④浦家へは士分、足輕中間、農兵の三つの階層から、各々一小隊三二人で編成される三小隊とその装備、そして士官一五人の計一一一人が指示される。この期の一〇〇〇石以上諸家は、一〇〇〇石に付二人役であることから、三七二一石余の浦家の軍役人数は七四人余となる。これは、士分と足輕中間の二小隊および士官の人数にほぼ相当する。ここから筆者は、士

分と足輕中間の二小隊および士官人数が、浦家から扶持を受ける陪臣・奉公人によって賄われるべき軍役人数であり、農兵一小隊は、それとは別個に、百姓身分のなかに見出された新しい兵力が、浦家備のなかに組み入れられたものと考え。これは、前年進発上京御供の軍役動員に際して浦家が行った、農兵を奉公人に身分変更して軍役人数に加えるという操作が否定されたものである。ここに、給領取立農兵を、軍役人数とは別個の銃卒要員として給主家の軍事力に編入し、その装備を自弁させて、家臣団諸家軍事力の一部として動員しようとする藩権力の意図を読み取ることが出来る。それは一方で、慶応初年の藩権力は、給領取立農兵をその給主家と切り離して動員することが出来なかったことを意味している。

しかし浦家農兵には、藩の農兵訓練規定に準じた定期訓練が浦家によって行われるほか、慶応元年一月、「上関宰判其外近郷之士農調練」のため萩より教授が派遣された際には、その銃隊稽古に浦家からも銃隊二隊が農兵込で差し出されている。^④また、藩より目付・軍政方・歩兵教授方が都濃郡・熊毛・上関・大島郡住宅の一〇〇〇石以上諸家を巡回して銃隊・砲隊を見分した際には、「農兵等撰ミ見分をも被仰付」ることが通達される。^⑤これは、藩の指導する統一的軍制の下に、家臣団諸家軍事力の再編が進行していることを示している。また近隣諸家や代官所管轄の郷勇隊、第二奇兵隊等との間で合同訓練や狩も催されており、蔵入・給領を越えた地域的まとまりのなかで、幕末期長州藩に特徴的な種々の軍事力が、一つの方面軍を形成している様子を窺うことが出来る。

この浦家農兵は、翌慶応二年（一八六六）の四境戦争において、大

島戦に動員される。そこで農兵は、それまでの砲隊に加え、陪臣・奉公人とともに銃隊にも編入されており、浦家銃隊内では、小隊構成員の、銃卒としての均質化が進行したと考えられる。この四境戦争以後、農兵にも総て苗字が記載されるようになるのは、その一つの現れであろう。また、この戦争では、農兵のうち松本喜三郎・繁富床之助・田中清之助の三人が「勇壮心得方宜分」として、各銀一枚を下賜されるが、ここでは農兵への賞美が、文久期に見たような、身分的特権の付与ではなくなっている。

次の動員は、慶応四年正月二二日から閏四月一〇日までの約四ヶ月間の小倉番兵である。この間の出張人数は六二人、ここには役人一二人と軍夫五人が含まれているが、小荷駄等の運搬にあたる軍夫数は、元治元年の動員に比べて大幅に減少している。またこの出張人数中には、農兵であることが確認される国行理太郎・藤本豊蔵らの名前が見えるが、前回大島戦と同様、出張者全員に苗字が付けられており、出張人名簿から陪臣・奉公人・農兵の別をすぐには判断出来なくなっている。勿論この名簿の筆順は、身分・階層や軍事技術の習熟度等に基づく浦家銃隊内での序列に対応しており、戦闘員としての均質化が各身分・階層間の序列を解消する方向に働いたとは考えられない。しかし、軍役を勤める士と、その補助員としての奉公人、そして百姓の陣夫役という、身分と役に規定された封建的軍事力内部での分業体制は、軍事力の洋式銃隊化とそこに配備される銃卒としての兵員確保の要請から、慶応軍制改革と実戦への動員の過程で、大きな変容を余儀なくされたことが確認されるのである。

むすび

幕末、対外的危機意識の高まりは、近世の身分制に依拠した軍役体系のなかでは非戦闘員であった百姓身分のなかに、農兵というそれまでとは異質な兵力を見出した。本稿で見た浦家の事例を整理しておく、浦家は、まず異国船来航に備える郷土防衛のために農兵を組織する。しかし、当初の動員では百姓夫役としての陣夫役と、労役の内容に大差はない。萩藩世子の進発上京が具体化する文久三年一〇月以降になると、浦家はこれをその軍事力における戦闘員の一部として動員するようになる。このうち元治期までは、農兵を奉公人に身分変更し、近世の軍役体系のなかで動員しようとした時期といえよう。慶応期になると、藩の洋式銃隊化政策が家臣団諸家にまで貫徹されたことにより、封建的軍事力内部の身分制に規定された分業体制の一部が解除され、農兵は、百姓身分のまま陪臣や奉公人と同様の戦闘員——銃卒として銃隊に編成されることとなる。その戦闘員としての動員が、農兵に戦闘者としての身分的特権——苗字帯刀を付帯させていったと考えられる。ここに、長州藩において封建的軍事力が変容していく過程の一つを見出すことが出来る。今後は、藩の直轄軍事力も含めて、封建的軍事力さらにはそれを規定する身分制そのものが解体されていく過程を明らかにする必要がある。

この問題を考えるうえで、他給領^④や蔵人地、各支藩等における動員の事例を蓄積し、それを藩の軍制政策と長州藩軍事力の総体の中に位置付ける作業が必要であることは勿論である。しかし、その際家臣団諸家軍事力が内包する夫役人数の減少等、幕末における動員体制の変

化を、それを規定していた近世長州藩の動員体制、さらには領主制・主従制等の問題も含めて、具体的に検討する必要があることが明らかになったと思う。これは、家臣団諸家軍事力ばかりでなく、いわゆる諸隊軍事力の、藩権力に対する自立性・自律性を議論にする際にも重要な問題であると考ええる。^④ 長州藩諸隊の研究は、長州藩における近世身分制に依拠した封建的軍事力の変質・解体過程と、そこから摸索される新しい軍事力創出の過程として、再構築が必要な時期に来ていると考えられるのである。

注

- ① 筆者は、長州藩を本藩と四支藩の総称として用い、本藩には萩藩の呼称を当てて、これを区別している。
- ② 奇兵隊研究については、田中彰氏「奇兵隊研究と明治維新」（『長州藩と明治維新』吉川弘文館、一九九八年）に、詳細な整理がある。
- ③ 三宅紹宣氏は、「幕末期萩市勇隊の結成と展開」（『山口県地方史研究』第四七号、一九八二年）で、奇兵隊に偏在した諸隊研究の現状を批判し、萩の町民を組織した市勇隊を萩町人層との関係から取り上げている。このほか、奇兵隊以外の軍事力を扱った研究として、軍制改革の過程から家臣団軍事力や農町兵を取り上げた小川亜弥子氏の『幕末期長州藩洋学史の研究』（思文閣出版、一九九八年）や、岸本寛氏「長州藩元治内乱における鎮静会議員と干城隊」（『人文学報』七三、一九九四年）、土屋貞夫氏「幕末期長州藩の農兵について」（『山口県地方史研究』第八一号、一九九九年）等がある。
- ④ 「幕末の軍制改革と兵賦徴発」（『歴史評論』四九九、一九九一年）、「幕府軍制改革の展開と挫折」（宮地正人氏ほか編『日本近現代Ⅰ維新変革と近代日本』岩波書店、一九九三年）、「慶応軍役令と歩卒徴発」（『歴史評論』五九三、一九九九年）等。
- ⑤ 小川亜弥子氏は、慶応軍制改革における家臣団の統制化を、「封建制下の軍隊の実質的解体」と評価する（同氏前掲書一八二頁）が、実質的解体

の内容が具体的に述べられているわけではない。

- ⑥ 寄組は一門・永代家老に次ぐ家格で、幕末期には六二家、内六一〇石余から三〇〇石以上が一家、一〇〇〇石以上が二八家ある。これら諸家は、馬廻組を統轄する大組頭や藩主に近侍し手廻組を統轄する手廻頭等の役職に就き、功績により老中に任じられ家老に列する。
- ⑦ 三七二・四三二石。内知行所は、熊毛郡上関宰判伊保庄に一四四・二八八石、同上関に一一五・七一一石、美祢郡嘉万村に四五三・一八二石、大島郡三浦村に二九一・二五二石（石川卓美氏「防長歴史用語辞典」四三六頁、マツノ書店、一九八六年）があり、総て相給である。
- ⑧ 近世期の軍事力編成については、高木昭作氏「日本近世国家史の研究」（岩波書店、一九九〇年）、笠谷和比古氏「近世武家社会の政治構造」（吉川弘文館、一九九三年）等の研究がある。
- ⑨ 『日本の社会史』第四巻、岩波書店、一九八六年。
- ⑩ 毛利家文庫七一藩臣日記二「浦日記」、山口県文書館蔵。以下年月日条とのみ記載するのは、この「浦日記」よりの引用である。
- ⑪ 「周布政之助伝」上、三〇〇頁、東京大学出版会、一九七七年。
- ⑫ 文久三年一月二七日条。
- ⑬ 同十一月二五日条。
- ⑭ 同十一月二七日条。
- ⑮ 「幕末維新期における豪農層の動向——長州藩地域を中心にして——」（蔵田貫氏編『民衆運動史Ⅲ社会と秩序』青木書店、二〇〇〇年）。
- ⑯ 勿論これは、萩藩における給人領主の領主権・知行権・主従制等の問題として、今後さらに検討が必要である。
- ⑰ この問題については、宮地正人氏「幕末維新期の社会的政治史研究」（岩波書店、一九九九年）がある。
- ⑱ 「修訂防長回天史」四、四〇九頁（マツノ書店復刻版、一九九一年）。「浦日記」は、毛利豊之進内上田従平よりの六月二二日の廻達として、六月二三日条にこれを載せる。
- ⑲ 文久三年七月一二日条。
- ⑳ この兵の観念については、高木氏前掲書、根岸茂夫氏「近世武家社会の政治構造」（吉川弘文館、二〇〇〇年）等の研究がある。

②① 同七月二九日条。

②② 浦家陪臣の階層構成は今後の検討課題であるが、現段階においては、中臣通り・大番通りが士分、一己通りは士に準じる一代抱え、その下に中間・小者と呼ばれる奉公人がいたと考えている。

②③ 文久二年四月二日、三日、六日条。

②④ 備立——陣押とその構成者は、戦闘様式や、家臣団軍事力の洋式銃隊への転換過程等を検討するうえで重要な情報を提供してくれるが、それについては、稿を改めて検討する。

②⑤ 文久二年五月四日条の国へ差し返す人数案に、四人の農兵の名前が見え、また同五月六日条には、供中差調のための若干の下賜金が、役人・諸士・一己・中間とともに農兵三人に支給されている。

②⑥ この教練では、一〇〇石に付二人の人張が達せられており(子五月「教練用意物覚」、元治元年六月初日条、三七二石余の浦家の軍役人数は七四人余であるが、ここでは陪臣・奉公人を合わせてそれを上回る八〇人が動員されていることとなる。

②⑦ 子五月「軍勘渡之事」、同六月初日条。

②⑧ 浦家では、前年九月、嫡子滋之助へ京都進発御供の内示を受けた後、靱負八二人、滋之助九二人の備立を定めており、その際両備の中には、農兵一五人、水陸夫役二五人宛が計上されている(文久三年一〇月一八日条)。繁枝原教練の備付は、これを基に、それを上回る農兵・夫役人数を組み込んで構成されたものと考えられる。

②⑨ この高禄家臣に対する萩藩の動員体制については、近世期を通じた動員の在り方との関連で検討が必要であり、そこでは軍役人数の内容や、国役としての陣夫役と、給領から取り立てられる百姓夫役をめぐる評価が重要な論点になると考える。これについては今後の課題としたい。

③⑩ 滋之助上坂時の出張人数は、今のところ不明だが、前述教練の目的が、進発上京時の備付を整えることであったことから、同程度の動員があったものと考えられる。

③⑪ 元治元年七月二八日条。

③⑫ 同七月晦日条。

③⑬ 文久三年七月六日条。

③⑭ 萩藩では、文久改革以降家臣に給領での住居を奨励し、高禄家臣諸家はそのほとんどが居宅を給領へ移しており、藩政諸機関や諸家との情報連絡網が十分に整備されない状態で、禁門の変以降の軍事的緊張を迎えることとなる。そのため、行政組織・軍事組織等、様々の命令伝達経路が錯綜した状況を生じている。この命令伝達経路の錯綜による支配関係の変化等については、今後の検討課題である。

③⑮ この間浦家では、五月二八日靱負の隠居が認められ、滋之助が家督、名を備後と改める。

③⑯ 慶応元年閏五月一日条。

③⑰ ここには、本人・嫡子ばかりでなく、その二・三男や陪臣の家来等が含まれている。

③⑱ 慶応元年閏五月二日条。

③⑲ 同閏五月初日条。

④① この慶応軍制改革における家臣団軍事力の再編については、別稿を準備中である。

④② 人張りについては、同年七月藩からの軍制改革に関する達のなかで、「千石已上下地持之面々者、是迄之通百石式人之御作法弥無相違」きことが確認されている(慶応元年七月一日条)。

④③ 慶応三年十一月、浦家は公借預石分を差し引いた三二四九石余のうち、四二八石五斗について、「知行高之内、石貫銀御加増石前書之通ニて、下地難決之所帯」を理由に、軍役人数の軽減を願ひ出ている。これに対し藩からは、石貫高に当る軍役七人が免除され、二二七石余に当る軍役人数の差し出しが命じられている(一二月二三日条)。ここから、慶応期の軍役人数も、石高を基準として賦課される性格に変更はないことが確認される。

④④ いわゆる諸隊とは違い、家臣団諸家は武器の自弁が原則であることから、当然この農兵一小隊分の装備と諸経費も浦家の負担となる。

④⑤ 慶応元年十一月一八日条。

④⑥ 同十一月二三日条。

④⑦ 同二年六月二三日条。

④⑧ 同四年二月二日条。

④⑧ 『熊毛町史』（熊毛町史編纂委員会、一九九二年）が載せる粟屋帯刀家（四九一五石余）の阻川兵の事例では、浦家と異なり農兵への応徴者がなかったことから、村が買食層・日用層から農兵を雇用している。これは吉田伸之氏が「日本近世におけるプロレタリア的要素」（『近世都市社会の身分構造』東京大学出版会、一九九八年）において指摘した「日本型傭兵」に該当すると考えられる。本稿で見た浦家の給領取立農兵も、阻川兵や藩の軍役不足分金納化政策によって大量に一括雇用された銃卒要員も、ともにこの期の軍事力構成の特徴の一部を示したものであり、これは、幕末期に見出された新しい兵力の供給基盤が、多様な地域社会状況に規定された多様な階層によって構成されていることを示しているといえよう。

④⑨ 諸隊の自立性をめぐって、井上勝生氏と青山忠正氏の間に見解の相違があるが、これは近世の萩藩家臣団諸家軍事力の藩権力に対する自立性・自律性の問題の上に再検討されるべきであると考ええる。

（付記） 本稿脱稿後、浦家農兵について言及した岸本寛氏の「秋良敦之助と海防―萩藩陪臣の幕末―」（佐々木克氏編『それぞれの明治維新―変革期の生き方―』吉川弘文館、二〇〇〇年）を得た。